ひとときのヒーロー

C・アドラー作
久米穣訳
北川健次画

THE ONCE IN A WHILE HERO

ひとときのヒーロー

C・アドラー作　久米　穣訳　北川健次画

THE
ONCE
IN A
WHILE
HERO

933 アドラー，キャロル
ひとときのヒーロー
久米 穣 訳
金の星社 1985
206 P 20cm
（文学の扉 20）

●ひとときのヒーロー
初版発行 一九八五年九月©
作 者／C・アドラー
訳 者／久米 穣
画 家／北川健次
発行所／株式会社 金の星社
〒111 東京都台東区小島一―四―三
電話・東京(〇三)八六一―一八六一(代表)
振替・東京〇―六四六七八
印刷・製本／ケイ エム エス

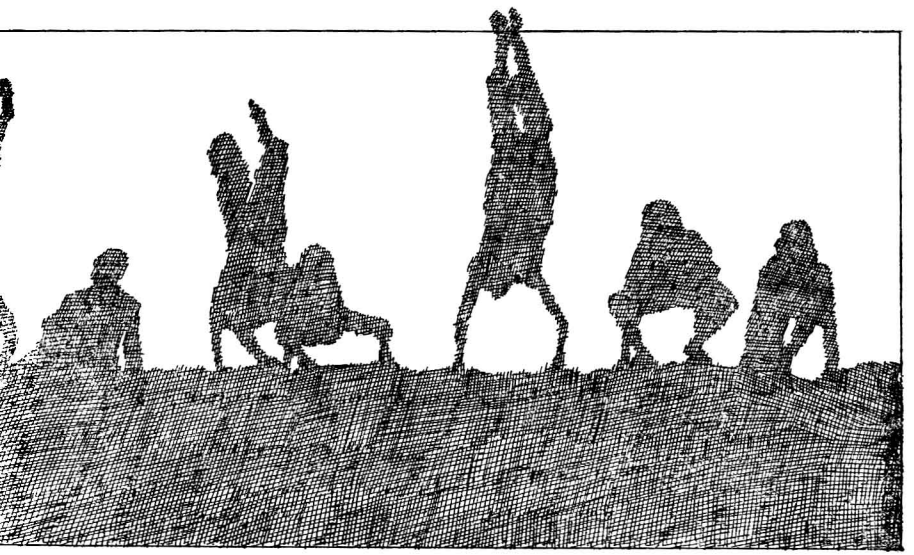
乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN 4-323-00910-0

もくじ

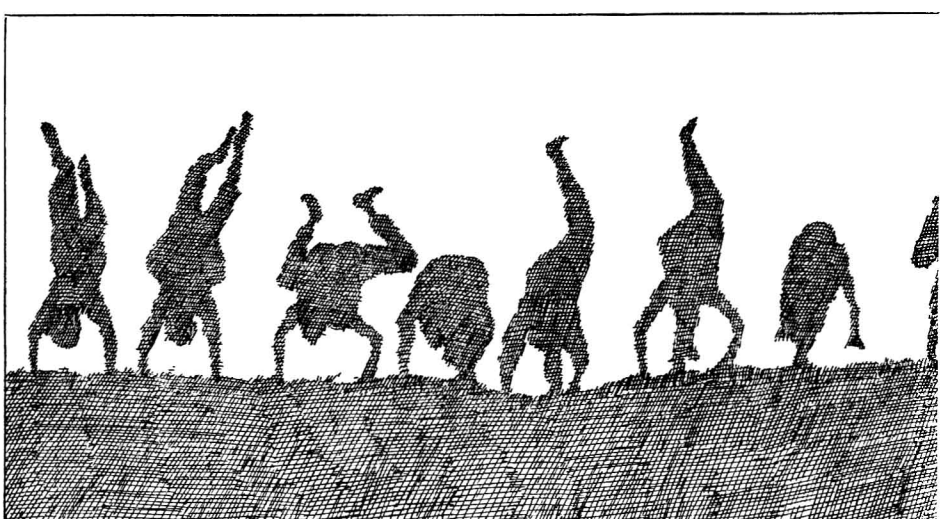
◎ひとときのヒーロー◎

1 転入生マッド 6
2 パットの疑い 25
3 パット、ボディー・ガードになる 47
4 きたないやり口 67
5 なくなった弁当のゆくえ 91



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

6 地下の隠れ家 108
7 最高の魚釣り 122
8 地下室への襲撃 141
9 ダンス・パーティーの日になった 161
10 マグルーとの対決 175
●訳者・あとがき 204



THE ONCE IN A WHILE HERO

by

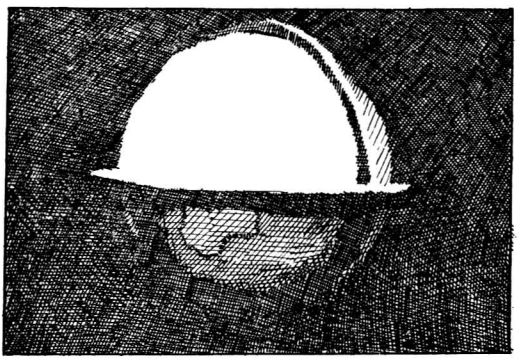
C. S. Adler

Copyright © 1982 by C. S. Adler
Japanese translation rights arranged with C. S. Adler,
c/o Carol Mann Literary Agent, New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo
Japanese edition published
by KIN-NO-HOSHI SHA Co. Ltd., 1985

C・アドラー＝作

ひとときのヒーロー

久米　穣＝訳



1　転入生マッド

「や、すまん。」
パトリックの机から、ノートを、わざと床にたたき落としておいて、チャック・マグルーはあやまった。
「気をつけてくれよな。」
パトリックが、ばらばらになりそうなノートから、顔をあげると、マグルーが、にやにやしながら待ちうけていた。
「あやまっただろ。」
マグルーは、清書し終わったばかりの、パット（パトリックの愛称）の英作文のノートに、よごれたあみあげぐつを、どっかとのせた。
『いいんだよ、チャック』って、いいたいんだろ？」
マグルーの目が、不気味な光でチラチラしている。それは、腕力をふるいたくて、むずむずし

ている証拠だ。

「ほんとにいいんだ、マグルー。」（クラスいちばんのがき大将は、敬意を持って姓で呼ばれる）

パットは顔を赤らめて、蚊のなくような声でいった。

「なんだって？」

マグルーは、あいかわらず、作文ノートを泥ぐつで、ぐしゃぐしゃにふみにじりながら、いらいらしたようすで、けんかごしになってきた。

「きこえないぜ。」

「やめてくれよ。」

「おまえが、『いいんだよ、チャッキィ』って、やさしい声でいったらやめるさ。おれは、おまえの口から、そのひとことがききてえんだよ、パティケーキ（あだ名パティちゃんといった感じ）。」

これ以上、みんなの前で、ひどいめに合わないために、パットは、かぼそい声でいった。

「いいんだよ、チャック。」

そのようすを、転入生の男の子が、まばたきもせずに見つめていた。パットは、顔をまっかにして、背とじが、ばらばらになったノートを持つと、こそこそと、窓ぎわに逃げていった。そこでは、スーザンと、ルーシーが、昼休みのキックボール（大型のフットボールを、ホームベースの上におき、攻撃側が、順番にける球技。投手がいないだけで、ルールは野球ににており、運動場で大勢で遊ぶのに向いている）のメンバー表を、夢中で作っていた。

ちょうどその時、いつものように遅刻して、クラス担任のネィバー先生が、七学年（アメリカでの七学年は、日本の、ほぼ中学一年生にあたる）の教室に、ゆっくりと入ってきた。先生はあいさつをしながら、あくびをし、生徒たちに向かって、なにやら、ぶつぶついっていた。

「マグルーって、本当にいやな子ね。」

スーザンは同情したように、パットに声をかけた。

「いつだって、だれかをいじめているんだから。」

「うん、でも、ふまれたのは、ぼくじゃなくて、ぼくのノートだったから。」

パットは、スーザンのために、なんとか笑顔をつくった。

「ところで、この組に転入生があったことを知らせよう。」

ネィバー先生は、出席簿の中から、カードを一枚取り出した。

「名前は、マルドューニィ。マッド・マルドューニィだ。だれか、しばらく世話係になってくれないか。」

世話係の仕事は、転入生に教室とか食堂、男子用トイレなどを教えたりすることだけなのだが、だれひとり、手をあげなかった。

「おい、きみたち。」

先生は、いらいらしたようにさけんだ。

「少しは、思いやりというものを持ったらどうだ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

転入生は買い手を待って、競売台の上に立っている奴隷のようだった。
コルク銃の的や、ボーリングのピンのように魅力があるわけではない。いつ、くしを入れたかわからないような茶色の髪のふさが、くしゃくしゃになって、まるい両ほおにくっつき、くちびるを、への字に結んで突き出している。
「ぼくがやります。」
かわいそうになって、パットは申し出た。だが、この同情心を、パットはすぐに後悔することになった。
時間割りを作るのを手伝いにいったパットに、マッドは、いきなりこうあびせかけてきたのだ。
「おい、おまえ、同性愛なのかよ?」
「えっ?」
「さっき、あそこの女の子のところに逃げていっただろう。おれ、見てたぞ。それに、おまえ女みてえな顔してるしな。」
「ばかいうなっ!」
パットはさけんだ。
「いやな、この学校にきた最初の日に、えたいの知れないやつに、かかわりあいたくなかったから、念のためにきいたまでよ。気にするなって。」
「勝手にしろ!」

転入生の態度に腹を立てて、窓のほうに行ったパットは、スーザンの席にすわると、考えこんでしまった。

いったいあいつは、ぼくのことをなんだと思っているんだろう。女の子と仲がよいから、どうだというのだ。スーザンとは、三年生の時から同じ組なのだ。知っている女の子の中では、姉のジュリーを除けば、スーザンは最高だ。天性の指導力があり、運動神経も抜群で、そのうえ頭も切れ、努力家で、責任感も強く、おまけにかわいい。仲よくして、なにが悪いのだ。マッドはきっと変わり者なのだ。見たところも、ちょっとおかしいじゃないか。

「どうしたの、パット?」

スーザンがきいた。

「どうもしやしないよ。」

「あの子、あんまり感じよくないわね。」

「転入生のことかい? あいつは、変なやつだよ。」

もしもマッドが、パットの正体を、たしかめるために、一日じゅう、影のようにつきまとわなければ、パットのなやみも、消えていたはずだ。

「おい、なんで、ぼくのあとばかりついてくるんだよ。」

数学の時間にも、だまってついてくるので、パットは文句をいった。

「だって、おまえ、おれの世話係なんだろ。」

「だれか、ほかの生徒にたのめばいいだろ。」
「手をあげたのは、おまえだけだ。」
パットはため息をついた。この学校に転入生としてくる子はたいへんだと、前から思っていた。なにしろ、仲よしグループが、きっちりと、できあがっている。
そう考えると、腹だちもしだいにおさまって、もう一度、マッドのめんどうをみてやろうかという気持ちにもなった。
「ぼくが、スーザンたちといっしょにいたのは、親友のマルコムが、腰の手術で、クリスマスまで、入院していなきゃならないので、その相談だったんだ。」
パットはいいわけした。
「マルコムも、おまえみたいに、女の子が好きなのか。」
「マルコムは、切手が趣味なのさ。おとなになったら、切手収集家になるそうだ。」
「なら、いいや。」
「どっちにしても、スーザンは、ぼくの友だちのひとりなんだ。」
マッドが、変に気をまわしているといけないと思ったので、パットはつけ加えた。
「おまえのガールフレンドってことか。」
「まあ、そういうことかな。」
これで、この件については、おしまいのはずだったが、あいにくと、その日は午後に図工の時

間があった。
図工のマックチェスニィ先生は、若くて、生き生きした魅力にあふれた女の先生だ。図工は苦手なのだが、パットは、この先生が大好きだった。自分に図工の才能がないのを、おぎなうつもりで、いつも先生の手伝いをしていた。前にパットが、
「ぼくの家族の中では、いちばん才能がある十五歳の姉のベッキィが、先生のクラスなら、よかったのに。」
といったとき、マックチェスニィ先生は、答えた。
「そんなことは気にしなくていいのよ。パトリックが、わたしのクラスにいてくれて、しあわせだと思っているのよ。」
それをきいて、パットは、ますます先生が好きになってしまった。
きょう、マックチェスニィ先生の図工用カート（手おし車）の上には、コラージュ（はりつけ絵）制作用のがらくたが、山のように積まれていた。ところが、マッドが、そのカートに、近よろうとした時、マグルーが、いきなり足を突き出したからたまらない。マッドは、カートにどっと倒れかかり、のりのびん、色紙、プラスチックの棒、発泡スチロールの荷作り材料などが、教室じゅうに飛び散ってしまった。
「みんな、そのままで！」
マックチェスニィ先生は、両手をあげて、生徒たちに動かないように合図した。この前もマグ

ルーが大さわぎをひきおこし、クラス全員がかたづけるようなふりをして、あばれまわるという事件があったばかりだ。

「だれか、この転入生がかたづけるのを手伝ってあげて。ほかの人は、説明したように、背景のボール紙を用意なさい。」

今度も、「手伝おう」といったのは、パットひとりだった。

「ありがとう。」

先生は、パットの肩をやさしくたたいた。

パットがかたづけ始めると、マッドが、またまた、首をかしげていった。

「女の先生にも、ひいきにされてんだな。本当に、おまえは女じゃないのか？」

「なにをいうんだよ。」

パットは、答えたものの、さっきもいやみをいわれたうえに、マグルーとのいざこざもあって、すっかり気がめいってしまった。

マッドにいろいろ教える責任があることなど、忘れてしまえばよいのだが、英語が終わると、転入生は、すぐあとにくっついてきた。

「この学校じゃ、昼めしは食わないのかい？」

「食べるよ。今から。」

パットは食堂に案内していった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com